

に詩歌茶の湯總て遊樂のみ朝暮の業として武邊心掛候者一人も無之候於此儀は吾等にまかせおかれ候へと御意にて御手切の御談合に御議定相極り申候事

一石州津和野御加勢之事三本松の城主吉見大藏大輔正頼より烏井伊豆と申士を吉田指越已前御内談仕候通に山口手切仕候定て陶方馬を向可申と存候故籠城の致覺悟候此段可得御意と存如此に候通被申越候使者の伊豆守は修行者の體に成候て參り候則御對面之上様子委敷御尋候て其後被遊御返答被指返候吉見方へ御加勢被遣候はてはとて御談合にて二宮隱岐守伊東某兩人被指越三本松籠城仕候左候處に大内義長より吉見逆意に付退治仕候間可有御出陣之通被仰越候へ共御返答は無別條被遊候て御内々にては御手切の御働御手遣被遊候此時津和野御加勢の儀に付吉川殿小早川殿其外へ被遣

候御書に徳佐御加勢と被遊候事

大内義長三本松之城被攻事

一天文二十三年三月朔日吉見大藏大輔正頼爲退治大内左京大夫義長山口を出馬有て長州渡川に陣を居らるゝ陶晴賢入道全姜先手にて同三月三日長州阿武郡嘉年の城を攻落し夫より吉見居城石州津和野三本松へ押寄る城よりも人數を出し稠敷相戦ふ同四月十八日於喜汁口防戦有之浦兵部少白井兩人の家來の者共手柄成働仕に付對主人義長より感狀を給る浦兵部少自分にも數度軍忠をはけますに付軍忠狀を上る義長一覽之通正判を居へ被下之左に書記 三月三日嘉年之城落の時楊井若狹守討取之同八月二日三本松固屋口にて蒙矢疵家來世良源左衛門事喜汁口にて能働を仕る同十一月十三日於野坂蒙矢疵と有之春より冬に至て攻候に付城中にて糧米乏くな

る就夫正頼の謀にて候哉加勢に被籠置候二宮伊東兩人塀へ上り大音聲に申けるは毛利右馬頭元就事吉見正頼一味仕當城へ爲加勢某共兩人指越籠置候元就は神領表へ致發向櫻尾并佐東金山等城々攻散候頓て山口へ可攻入候間御用心有へしとよははるを陶入道是を聞て大に驚き三浦越中守を呼て如何可有と談合仕る越中聞て是は正頼の謀成へし誠にて候は、江良方より注進可仕といへは左も有へしとて到來を待ける處に江良丹後守より元就逆意仕り正頼と一味無紛候通申越に付内藤彈正右田左馬助弘中三河守其外大身なる者共呼集談合の時各申候は先吉見とは和陸被成元就を御退治有へく候元就於御退治は吉見は自ら御手に隨ひ可申といへは入道も其儀可然存候乍去今一攻稠敷攻候て敵の強弱を見て後和談に可仕とて大かた和談に相成候事

元就公防州御手切之御働之事

一天文二十三年五月十二日元就公吉田を御出馬有て神領へ御働被成候陶一味の者共七百餘人罷出五日市にひかへ居候に付此方より押掛合戦を初る飯田七郎右衛門熊谷家中末田新右衛門一番に首を取しかと大將もなき集り勢なれば即時追崩し首六十餘討取候同十八日佐東へ御馬を向られ金山の城へ兒玉周防守を被遣我等事防州令手切當城へ發向候城を明渡し可被申候哉左もなく候は、押付攻つふし可申の通被仰懸候へは城主栗田肥後守不及異儀御請申上城を明渡候小城には麻生右衛門鎮里兩人罷居候是へも同人御使に罷越御意之趣申懸候處に是又無別條御請申上候に付一命御助被成三人共に防州境かい田迄御送らせ被成酒さかな飯米等被遣忝奉存候様に被仰付候夫より廿日市洞雲寺へ御打出被成櫻尾の城へも右之通

に被仰懸候熊谷信直よりも以使者取扱被仕候己斐豊後守理右衛門
新里宮内掃部さし式部さし 彼等兩人は地士にて御座候へは人質進
上仕御先衆に加り御馳走可申上の由申に付望に被任候箱島に御陣
の時罷出御禮申上候へは本知無相違被下置候毛利與三事は山口へ
罷下度由申に付送り被遣候草津の城主羽仁越前守事は此御方より
内室を被遣候に付別て御懸意被遊候へ共陶一味仕山口に罷居候故
留守居の者共を退出被仰付福原内藏助に二百の人数を御付候て城
番に被仰付候櫻尾の城には桂元澄を被指置仁保島には香川左衛門
尉を被籠置候事

付角山之事

一大野の角山と申古城有之防州より取入の所にて候に付破却被仰付
以來城に成不申候様に可被成之旨吉川殿へ被仰渡候就夫元春彼地

御出張候て被仰渡之通に破却被爲作候て御歸候事

警固衆働之事

一御當家御領分は藝州奥郡にて御座候に付以前は警固衆一人も無御
座候處に天文十年の三月に武田刑部少金山の城を退出仕りて後佐
東河之内衆御手に入候河之内の頭分は山縣筑後守福井五郎飯田越
中同七郎右衛門賀屋市助にて候大頭には兒玉内藏大夫被仰付候天
文二十三年五月十二日陶方と御手切に成同日に佐西に居申候者共
もみな佐東へ引越箱島矢賀に罷居候佐西は陶方にて候故毎月罷出
小迫合仕候同年五月初頃に神領大野に大島衆三百計船二十四五艘
懸候て佐東金山備後の内山口味方中の城へ兵糧籠申手遣を仕候に
付吉田へ其通注進仕候處に兒玉周防守被召出早々切取可申之通御
下知被成候に付河之内衆三百計に熊谷信直の人数二百計加勢に參

候に付以上五百計の人数にて押懸候處に熊谷家來は船不案内にて大略は醉候て役に立不申候少々醉不申者有之候ても船中の働不存に付結句妨に相成候此時飯田七郎右衛門一手大島警固桑原掃部舟印を目に掛無理無體に切懸り桑原を討取候是を見て敵共楫を入候に付追討に悉く打果候兵糧大分船底に御座候をは此度の御褒美として河之内の者共へ拜領被仰付候又同年九月能美島へ警固兼働可申之旨被仰付候故同廿九日に彼島へ働申候近所城持兼熊谷伊豆守香川左衛門三須兵部など被罷出一同に致渡海悉く放火仕陶方の者共無殘打果候に付能美島御手に入申候此節迄は八木府川邊迄金山の知行にて八木の城主栗田肥後守相防吉田より通路不自由に御座候故河之内頭分の者共替り々々加部に相詰申候事如件

長安御退治之事付懸の橋迫合之事

一天文二十三年の六月石州の住人長安と申士以前は御當家御味方の處に陶方へ現形仕候に付吉川治部少輔殿を大將として熊谷信直天野隆重其外小身衆都合人数二千計被指向候同月廿二日元春彼表へ被押寄候處に長安小身者にて候故城を明益田藤兼を頼み退出仕るに付同七月二日元春大塚の光明寺へ御打入候然處に小坂宮内と申者を大將として大田吉和山里所々の一揆集り二千計大田のかけ橋を前に當て陣取居候就夫吉川殿より今田上野介二宮木工助森脇大藏大夫被指向候此懸橋面一尺計の一橋なれば渡し候事不相成橋の本に人数つとひ候處を一揆共矢尻を揃へ射立申に付ふみこたへ居候事難成候此様子を見て二宮木工助森脇大藏大夫兩人面もふらす橋を渡り小坂宮内備へ切て掛る今田上野介も續て橋を渡し是も宮内備へ掛る此勢ひを見て宮内備の後にひかへたる一揆共見くつれ

に崩れて逃ちる宮内一さへはさへて戦ひけれ共後陣崩れければ不及力引退く所を追掛數十人討取得勝利候事

折敷畑御合戦之事

一陶入道全姜元就公御手切を聞て毛利家をおさへさる時は吉見を攻候儀成間敷とて周防長門の残り人數を催し藝州境の郷人を集め其上藝州大田山里の一揆を催し防州山代の地侍甲田丹後を頭に申付都合人數三千六百宮川甲斐守を大將として宮川清左衛門同彦三郎末富源太左衛門を相添此御方の押として指上せ候天文二十三年九月十四日に藝州の内山里河内倉主石道など、申所へ相働元就公御父子兩川殿宍戸殿此外御幕下衆都合三千五百の御人數にて廿日市櫻尾の城に御在陣被遊諸所御手遣被仰付候て宍戸隆家福原貞俊を召て山里河内邊へ働候敵の人數如何程可有之候哉様子見分の働可

被仕之通被仰渡候に付同十五日の夜半に廿日市を打立て彼在郷へ働被申候處に小方大野に陣取候山口勢十五日己之刻計に廿日市御陣所より西の方折敷畑へ打上陣取候櫻尾の御本陣よりは中間二十四五町程有之山のあなたに續き如何程人數有へきも不知定て陶入道津和野を攻崩隙を明候て罷上り候哉と總軍存に付ちと騒ぎ立候折節巖島の神主石田六郎左衛門御久米卷敷を捧參上申候此石田は熊谷信直常々懇切に被仕候段御存に付信直を召て御逢せ被成其後石田に御對面被遊候處に石田申上候は今曉奇特の靈夢を見申候陶入道と御合戦御座候處に御當方御勝利にて被遂御本意候段正敷御神の御告餘り奇特に奉存御久米を捧持參仕り候通申上候元就公被聞召此時節如此之段神慮御加護不淺得勝利候儀無疑儀共也と御意にて御久米卷敷御頂戴被遊其後隆元公を初め奉り御一門衆御家

老衆御幕下の面々不殘頂戴被仰付候頭々を以下々へも此段被仰聞に付總軍しつまり申候扱宍戸殿福原殿へは早々可被罷歸の由被仰遣候に付取物も取あへす兩人共に被罷歸候陶方若三本松を攻從へ隙を明候て出張仕たる儀も可有之と被思召候兎角今日の御一戰御議定被遊御手配御談合の時口羽刑部少被申上候は箇様の時我も人も遠慮計にては御用に立不申候一手立つ、申上御用に無之儀をは御取上なき迄に候間遠慮を不省申上候元就公御父子様は此櫻尾に御籠城被成候は、陶をしよせ取巻可申候各申談一命を捨防戰可仕候此城も如形堅固なる地にて候間數日を経候共敵方勝利有間敷候其内能時分を御考被成御馬を出され候は、敵多勢たり共悉く打捕可申と被申上ければ被聞召申さる、所も最にては候へ共夫は後詰を頼候時の儀也唯今對我等後詰有へき方なし兎角今日遂一戰可決

勝負候條各左様心得られ候へと被成御意候然處に兒玉三郎右衛門罷出御評定の間に時刻移り候拙者先御手廻りの者共召連罷出敵陣の備旁見合可申とて御座敷を立被申候へは元就公御機色變せられ毎事三郎右衛門儀つよみ過候推參の儀也と御意にて御しかり被成候へは宍戸隆家何時も三郎右衛門指出をは御赦免可然存候とて高聲に笑ひ被申候此隆家一生の間笑顔を人にみせられたる事なき生れつきにて候處に又から々々と高聲に笑ひ陶は天命につきたる者にて候今日御手をもよこされ我等なども手をよこし可申と御挨拶にて候其後御一戰御手配には小早川殿一手は七尾の西の方へ廻し敵の跡を討へし吉川殿一手は折敷畑北の方の山へ押上げ敵の旗本へ横合に懸るへし宍戸殿福原殿兩手は是も北の山陰より押上敵の後へ廻し可打崩候御旗本は本道筋へ御備を可被立と被仰渡御打出

候折敷畑の前にへうと申て民屋百軒計有之在郷あり此邊はせうと
う岩有て五間十間と馬など乗られ候場なく足かゝり悪敷候本道の
脇東の方に川有此川を隔てへうの郷の南に御旗本を備へらるゝ坂
新五左衛門坪井將監を召て敵をふひき候へど被仰渡候將監承り敵
を突ちらせ一番高名仕れどの御意には違敵をふひき候へどの御意
は逃よどの儀也御請の申上様も可有之所と存せらるゝ方も可有御
座候へ共此將監はかゝれど御意の時は懸り逃よと仰せらるゝ時は
にくる男なりと申捨御先へ罷越候敵はへうの郷を心さし坂下の原
と云所迄押下る所へ坂新五左衛門坪井將監足輕をつれて行掛る足
輕共少々矢を射懸高聲によははりけるは譜代相傳の臣下として主
君を討奉る無道人に一味仕る程の山口の腰ぬけ共何やうの事ある
へき哉かゝれ々々ふみつふさんどのゝしりければいとゝはやりた

る敵共此言葉に腹を立我先にと切て懸る本より被仰含たる事なれ
は一さゝへも不支して逃歸る敵は勝に乗て逃るを追かくる此間に
御旗本を坂下迄寄らるゝに付御旗本の前へ追懸來り御旗本を目に
かけ突てかゝる御旗本組の志道口羽桂兒玉粟屋赤川國司渡邊其外
いつれも自身鎧を取て相かゝりに懸るといへ共せうとう岩有て掛
引自由ならず此様子を見て敵方の二陣宮川清左衛門同彦三郎末富
源太左衛門山代一揆大將甲田丹後同嫡子與三郎赤根栗林以下山よ
りおろし合せ先陣を援はんとすれ共道悪敷して急に掛る事ならず
其内に小早川殿敵の後より掛り給ふ宍戸殿福原殿も如御下知掛ら
るゝ此時宮川甲斐守旗本も山八分目迄おろして相戦ふ然處に宮川
清左衛門深手を負ければ一手の備もめ合候てしどろになる此様子
を見給ひ吉川元春采配を取ておくれたるか各急に掛て突崩せと下

知し給へは御相備の熊谷伊豆守嫡子兵庫助天野紀伊守香川左衛門尉佐東河の内衆には飯田七郎右衛門山縣筑後福井福島豊島の面々おもてもふらす突てかゝりいつれも手柄成働を仕る中にも熊谷兵庫此時小十六歳真先に進て突てかゝる伊豆守是を見て小次郎うたすなどよははりければ有田四郎石内傳内八木八郎末富を先として六十餘人切先を揃て切て懸り此勢ひに敵の旗本崩れて山を上りに逃上る御旗本にては敵の先勢を追崩し志道口羽桂赤川國司粟屋兒玉黨其外大小身共に御眼前にて手柄成分捕を仕る中にも田中五郎兵衛手柄成働を仕討死する吉川殿小早川殿穴戸殿福原殿其外相備の衆の家來にも歷々手柄仕たる者多し敵の大將宮川甲斐守をは熊谷伊豆守家來末田新右衛門討取之折敷畑の後在郷くしま白迫津田友田淺原を追留にして追討に諸手へ打取首數七百五十餘級也天文

二十三年九月十五日折敷畑御合戦とは是也仍如件

右折敷畑の御合戦天文二十三年六月朔日と記たる舊記も有之陶入道吉見と和睦し自身折敷畑へ出張と記たるもあり又人數壹萬五六千或は一萬ともあり此方へ打取首數一千七百餘級と記たるもあり備後衆此方の御手に屬し此合戦の時抽忠節たると書したるも有之異説多し備後衆の内小早川殿の外は皆義長に屬し津和野へ罷出候事

元就公御歸陣之事

一折敷畑の御一戦御勝利の後櫻尾の城へ御打入被成諸將被召出苦勞被仕候通御感被遊御直參の衆は不及申各家來の者に至迄手柄の御詮議有之御感悅之旨被仰渡櫻尾草津仁保島等の城々御仕置被仰付翌十六日には佐東金山の麓へ御陣を替られ其後吉田御歸城被遊候

事

吉見正頼大内家の降参之事

一天文二十三年三月大内左京大夫義長吉見正頼退治として石州津和野表へ出馬有て同十一月迄三本松の城攻らるゝといへ共城中堅固にて落去不仕内此御方御手切に成候に付先づ吉見方とは和談有て此御方へ屋形被向御馬候様に仕度と陶入道存候折節城にも長き籠城に付糧米無之吉見方より降参の詫言申に付無子細入道致領掌正頼嫡男を人質に取和談相調同年十一月末に義長の御供仕陶入道も山口歸陣仕候事

伴田之事

一天文二十三年十月廿五日伴田の固屋御切崩させ有へきとて御人數を被遣候御手廻衆罷越即時切崩し敵數多討取候て各手柄仕候中に

も粟屋縫殿允手柄無比類候に付御父子御兩判の御威狀被下之事如件

吉田物語卷第四終

吉田物語卷第五

天野右衛門入道慶菴事付江良丹後守被誅事

一大内左京大夫義長津和野歸陣有之陶入道を初め一門家老悉く召集
め毛利家退治の談合の時江良丹後守兄江良彈正左衛門興綱罷出良
將は不戦して謀を宗とする由古今申傳候條先間諜計策の御密談可
然と申上げれば一座の面々尤無餘儀存とて間に可被遣人柄誰と詮
議の時天野右衛門入道慶菴事才智あり武功も有之人の氣をも取そ
こなふ者にてなし此者可然と撰ひ出すに付頓て陶入道慶菴を呼て
義長仰として右之趣具に申聞せ候慶菴承り御家來に人多き中を撰
はれ私に被仰付候御心入難有奉存候誠に間を用る事古今御座候と
承及候乍去間に被遣候士は武功才智有之者ならては調候事不相成
儀に候私式何としてか首尾を調可申候哉別人に被仰付可然奉存通

再三辭退仕候全姜聞て御前にて御詮議の時御自分ならては此儀を可被調仁無之候との御吟味にて被仰出候へは御理りは立申間敷候屋形おほし候儘に此御役被相調御一戰於御勝利は御恩賞は御邊の望に可被任候此儀偽にて無之とて誓紙に血判を居て出之慶菴も此上も辭退仕候時は却て臆したるに似申候間御請を申上候仕得可申事は万に一と被思召候へ乍去若事顯れ候ていか様の責に合申候共白狀は仕間敷候忤兩人御座候間御取立被成可被下の通申て後先入道の被思召寄候處の御手立を承り度と申せは全姜聞て御自分には智惠才覺他に勝れたる仁なれば委細申に不及といへ共大概を物語仕へし敵は此度畑の合戰に得勝利彌利につのり此方へ働可申候間此御方の御人數を二つに分一手は御庄川へ打出一戰仕り得勝利候時は申所なく候若失勝利候は、横山へ引取城を堅く守り敵を誘引

よせ可打果候又敵川を不渡して對陣せは分置たる勢を東へ廻し大竹より敵の後を襲ひ戰ふに於ては味方の勝利疑不可有之我等存る所是也といへは承届候と申て慶菴退出する其後に無實の科を申掛慶菴を追放する因茲浪人致し一僕もつれす本より近付なれば平佐源七郎所へ尋來る源七出合いか様の子細にてかやうの體になられ候哉と尋ければ慶菴涙を流し貴所御存の通に右馬頭殿御懇の私にて候へは陶入道萬に就致隔心候折柄讒者有之無實の科を蒙り追放せられ箇様の體に罷成候自害をも仕度候へ共餘り無念さに左様も難仕候て便るへき方のなければ御心底御恥敷は候へ共致參上候由申に付源七も横手を打て扱々案外なる儀共に候乍去とくと御休息有へし次手を以右馬頭殿へ申聞せ候は、先年より懇の儀に候條無子細許容可被仕と申て慶菴を休息させ源七は御城へ罷出右の段具

に申上候へは被聞召彼者儀は義隆御没落の砌陶方一味仕さひ矢を射懸たる通聞及候一廉申付度事なれ共敵方の様子被聞召度折柄なれば早々致同道可罷出の通就被仰付罷歸御意の趣申聞せ候へは扱扱難有き儀共に奉存候とて源七同道し御城罷出候處に元就公被遊御對面扱々其方は先年の好みを不忘此方へ参り候儀況著に候彌不相替於心底は所帶の地をも可被宛行旨被仰下候慶菴も涙をたれ難有上意生々世々忘却仕間敷の通申上候其後慶菴を御側近被召寄敵方の事共同ひ聞といへ共其實否不糺候處に其方不慮に参り候儀誠天の與へ給ふ所也晴賢の行如何候哉と御尋被成候へは慶菴承り去る畑の合戦に味方打負申に付晴賢も勢ひを失ひ候て追日人数も減少仕候され共弱氣を見せ不申候様にと可存候間岩國へ出張仕り横山に陣を取可申候左候は、早速被向御馬御退治御手間は入申間

敷候被遂御本意にゐるては此慶菴も御威光を以素懐を遂け難有可奉存の通申上る元就公被聞召敵方の儀共無御心元被思召候處に委細御聞届被成被遊御案堵候其方ならては誰あつて箇様に可申上とて御感悦不淺候慶菴は心底に大かた申調候と存致満足候此御方へ参上仕候は、定て陶方の様子等御尋可被遊に付委細に申上一日も早く被向御馬御退治被遊候様にと奉存致参上候通申上候元就公御意に早速馬を向退治すへきと被思召候へ共爰に密事の儀あり其方など如きの別心なき者ならては聞せられず候江良丹後守事此方内通候我等も内々申談度存候に付彌約束の辻違變無之様にと思ひ忍て使を遣候處に周防一國の約諾にて起請文指越候興房方より一左右次第に令出馬可打果候乍爾其後到來無之候畑の合戦にも興房事出不申候万一隠謀顯候哉無心元候是を見候へとて興房起請文御見

せ被成候へは慶菴仰天仕扱は丹後守御味方仕候哉彌御退治は無疑奉存と申上るるにて御意に其方事日來の好みを忘却不仕此方を頼み參候儀誠に我等武運の強き印也岩國へ忍ひ行興房と令密談陶と偽引出し討果候行可仕候興房其方を疑ひ不申様に御狀と可被遣候通被仰聞候へは慶菴悦ひ箇様の御使をも可仕私と被思召如此の御意難有奉存候御書被遣候は、致持參興房と密談可仕と御請申上る元就公御意に御請如何様に可申哉と被思召候處に無別條申上御祝著被遊候此儀相調候は、任望御恩賞可被宛行の旨被仰聞次には箇様の申談不調候内に敵嚴島へ渡り海上の運送を止申候時は味方の損多し何とそ入道嚴島へ渡り不申候様に才覺可仕の通被仰含候へは慶菴畏り奉存と申て御書を請取早速防州へ罷下岩國へは行す直に山口へ下り陶入道に相對候て様子委細に申聞せ御書を取出し

全姜に見せ候へは入道手を打てかゝる足下の大事を知る事武運全き印也急き江良丹後守父子を可打果と治定候則興房は分別ある者なれば少もがさつなる奢なく弓矢の本意を考へ陶方へ申越候は此間敵方に目付を置元就行跡を承り候に武略智謀他に勝れ其上一門家老其以下迄悉く衆議一味仕候間小身に候とてあなとり御退治可有事存寄も無之候何とそ御和睦有之對御當方元就疎意無御座候様に被仰談候は、往々御爲可然可有之旨申越候へは却て入道存候は彌毛利家内通の儀無紛と申て段々に打手を遣し岩國琥珀院にて丹後守并嫡子彦三郎父子共に闇うちに相果し左候て後三浦越中守を指越岩國に置申候事

元就公吉見正頼御對談之事

一吉見正頼籠城の時爲御加勢被遣候二宮伊藤兩人正頼よりみの地迄

被送返候正頼口上には此度陶方和平の儀前廉申談候首尾相違仕迷惑に奉存候乍去當分糧米につまり一先和談仕候申談候趣は少も相違無御座候と被申重疊御理に候然は以前申談候様子に付御面談仕度儀御座候間中途へ被遊御出候へかし直談仕度と申越れ候に付日限御極め被成互に御馬廻り計にて被成御忍中途に御出合被遊御談合の時元就公被仰候は御息の事山口に被居候難被指捨儀に候如何可被成哉と御尋候へは忤の儀は我等手立を以引取可申候間御心安可被思召候通被申首尾相違無之様に御談合畢て被遊御歸候其後正頼事山口へ被參此間進置候忤の母難儀に相煩申候一子にて御座候に付一目見候て相果申度と申て歎申候暫時の御暇被下候様にと重疊被申候へ共兎角の返事も不相聞候に付路次迄迎の者共歴々呼よせ夜に紛れ子息をぬかし渡川迄先へ遺跡より正頼も急に歸り被申

候山口衆聞付大人數にて追掛候へ共打留候儀不相成正頼父子無異儀在所歸被申候事

嚴島新城被築之事

付敵船之事

付已斐新里書狀之事

一元就公被思召候は陶入道事定て此方へ發向可仕候左候時は豊筑防長大内家代々の領國にて候間堅く人數二萬は可有之候味方は僅三千不足の可爲人數候平場にての御一戦は御勝利危く有之へし嚴島に新城を築何とぞ御手立を以陶を彼島へ渡海させ有無の御一戦可被遊との御工夫にて嚴島に新城を御築せ可被成旨被仰出候御家老中を初め不入所に城を御拵被成候事御人數のつゐるなりいかしたる御奥意にて候哉と各不審被仕候然は其後城地御見合可有とて

急に御渡海被遊候所にいつくより参りたる共不知敵船三艘御座船へおし懸候に付御供船の衆御座船の間へ乗込敵船を隔て防ぎ申候此様子を見て浦兵部少飯田七郎右衛門等軍船を漕出し急に押付攻戦ひ桑原掃部助と名乗て真先に働き候敵を飯田七郎右衛門討取に付敵船漕逃候を押懸數多討捕候御供船の衆并兵部七郎右衛門手柄なる働を仕候御眼前の儀なれば一入御感悦被遊各被召出此度城地可有御見立と被思召御渡海候處に不慮に敵船來り既に可被及御難儀處に各手柄なる働也へ被得御勝利御滿悦不淺是ととも大明神の御加護と被思召候と御意にて一入明神を御信仰被遊候夫より直に御渡海被遊數多の首共かけおかれ於當島陶入道を被打果可被遂御本意瑞相なりと御觀念被遊の由に候其後城地被遊御見立普請被仰付頓て成就の上已斐豊後守新里宮内少兩人を大將として寄合人數

五百餘被籠置候吉川殿衆には樋口彦兵衛佐伯源左衛門備後衆には江田の垣ノ内伊藤片岡福原殿衆には福原刑部大夫此外小早川殿穴戸殿被籠置候弘治元年の春城普請成就仕候事

一山口より櫻尾の城に籠置候毛利與三事は元來御同姓なるに依て御當家を頼み大永年中に關東より被下候元就公御許容被成大内義隆に預け被置候へ共御没落の刻陶一味仕る殊に入道氣に合伽の者の如く心易く罷成候に付別心有間敷と存櫻尾の城へ籠置候右の様子に付元就公御手元に罷居候は、御助被成間敷と存陶得厚恩候儀理を申立山口へ罷下度の通申に付て彼地へ被送捨候山口へ罷下彌入道側近く奉公仕に付已斐新里より書狀を遣す其文に曰貴殿御事全姜入道に御隨身の儀不及是非存候御存の通彼者事大内家代々の大臣にて得恩祿座上を仕なから忘重恩義隆公御父子を奉討事誰か是

をにくまさらん哉是のみならず御養君三位中將殿此外攝政關白遂
たまひたる二條左大臣尹房公又公卿殿上人爲何恨も有間敷に恥辱
をあたへ殺し奉る事前代未聞の儀也誠に人面獸心の惡人とは箇様
の者を可申候然るは御隨身無勿體存候以前御一所に罷居御懇志難
忘遠慮を不省如此に候右馬頭殿へ御降參尤に存候於御分別は兩人
申談宜様に可申調候早々當境御越候は、定て各一所に御勤候様に
可相成候以前に不相替申談度存候通申遣候へは頓て其書狀を入道
へ入披見候全姜此狀を披見候て以之外に立腹して急彼島へ渡海し
一時に城を攻崩し兩人の首獄にかけ憤を可散とて怒り申の由候事

野間隆貫御退治之事

一安藝の府中海田の保木の城主野間隆貫事以前は此御方へ御馳走仕
候へ共防州御手切以後は陶方一味仕に付山口より小幡左衛門羽仁

中務兩人に人數三百餘付て指上せ保木の城へ被籠置候然るに付隆
貫事吉田の様子承り合せ山口へ注進仕の通被聞召天文二十四年弘
治元春保木へ被向御馬候吉川殿小早川殿宍戸殿此外御幕下衆都合
御人數三千五百也福原貞俊志道廣良は御旗本の御先手にて被押寄
候吉田と保木の中間十里計有之此間に賀部川とて大河あり川を不
渉して行時は温本とて保木の城下に近き在郷あり此御方には定て
川をは御渡し不被成して温本へ可被寄と敵方に考城兵大形温本表
に出て待掛候處に御旗本を初め總人數賀部川を渡し佐東表へ被寄
候様に敵に御見せ被成候へは温本へ出候人數を城より呼返し西の
方へ指出し候夜に入候て吉川殿小早川殿宍戸殿三家の人數を跡へ
戻し川を越させ温本へ押よせ候様に被仰付候故野間隆貫是に驚き
西の方へ指出候人數又呼返し温本へ押向候其時御旗本を東の方へ

よせられ候へハ城兵案に相違し東西の敵を防ぎかね候刻御旗本の先衆福原貞俊志道廣良兩手を以本丸と取出の間被取切候小早川殿衆一番に天神山へ乗込候吉川殿衆は出城の新丸へ乗込候に付野間不叶相降參の御詫言申上候熊谷信直取扱を以隆貫家老野村助五郎一人切腹被仰付隆貫一命被成御助下城仕候山口よりの加勢小幡羽仁事は山口へ送り捨られ城をは則破却被仰付候高名の衆御旗本にては赤川左京亮同源右衛門栗屋彌四郎兒玉四郎兵衛志道源藏桂善左衛門此外追て可記之小早川殿にては井上又右衛門吉川殿衆には森脇市郎右衛門無比類手柄仕候事如件

防州御庄御出馬之事

一弘治元年五月十五日防州御庄へ御出馬候敵少々打出小迫合有之粟屋木工助手柄仕り元就公御父子御兩判の御感狀被下之夫より神領

表へ御馬を被向候處に町野入道同相摸守兩人大將にて畑の合戦に打もらされたる者共一千餘出向ひ明ヶ石表に罷居候元就公敵の様子御覽被遊畑の合戦に打負たる者共殊に小勢にてひかへ居候は十死一生の合戦可仕と存切たる者共なるへし少もあなとること不可有之と被仰一の御先吉川殿熊谷信直二の御先小早川殿穴戸殿天野隆重三は御旗本組也同月十三日此方よりかゝつて合戦を始る敵も兼て期したる儀なれば少も不退相戦ふ處に二陣の小早川殿穴戸殿相備共に一同に押出し横鍵を入らる其時御旗本衆我先にと突て掛る此勢に敵崩て逃るを追掛七十餘人討取候御旗本にて手柄の衆は粟屋木工助佐藤又右衛門中村新右衛門いつれも元就公御父子御兩判の御感狀被下之中にも木工助は先掛仕候との御感狀也兩川殿穴戸殿其外御幕下衆の家來にも手柄仕たる者多し追て可記如件

一右明ヶ石合戦同日に藏主の固屋御破らせ被成候時河村又三郎手柄仕御父子御兩判の御感狀頂戴仕候事

吉和山里御出馬之事付高森之事

一同年七月元就公隆元公吉和山里へ御出馬被成候處に吉川殿も御出合候て御一所にて此度は一揆共の根を御たち有へきと御談合候然處に一揆共防州勢に相加り切所を搦へ罷居候通被聞召同月十三日押掛られ即時に追崩し二百餘人被打捕候吉田衆には井上助十郎は居源右衛門事也輝元公御代備中賀茂にて討死兒玉四郎右衛門桂善左衛門福原總右衛門井上民部坂新五左衛門福原左京轉與太郎同與三左衛門富落小次郎同七郎左衛門與鐵炮の者手柄仕候就中富落小二郎轉與太郎と名乗て敵二人切伏手柄仕候いづれも御感狀被下之吉川殿衆には二宮木工助森脇市郎右衛門朝枝因幡山縣四郎右衛門手柄仕候事

一藝州友田の高森と申山を城に拵へ防州より武田刑部少輔信實を大將として八百餘の人数を籠候に付此御方よりも狼山を向城に築き進藤豊後守を被籠置候此武田刑部少事尼子晴久より武田家断絶候時彼家を相續させ佐東金山に居住被申付候處に天文十年晴久吉田敗軍の刻城を退出仕に付其後は尼子殿無許容に付浪人仕防州へ罷越候故如此に候事

尼子晴久新宮黨被討果事

一新宮黨の由來を尋るに尼子修理大夫經久後守伊の二男刑部大輔國久後守伊是元祖也經久嫡男をば民部大輔政久と云永正十年九月六日雲州阿與の城にて矢に中て死去也政久の嫡男民部大輔晴久後守伊夫成長し給ひて後伊豫守經久より孫讓りに家督し給ふ因茲國久は晴久の爲には伯父也國久の嫡男民部少輔誠久と云二男兵部少豊久

三男小四郎敬久四男又四郎五男與四郎又誠久の嫡子を刑部少輔氏
久二男甚四郎吉久三男善四郎季久四男孫四郎後實名然に晴久の嫡
男左衛門督義久を國久聲にとられければ一門と云武功と云一族衆
多けれ共威勢雙ふ方なし就夫元就公新宮黨堅固なる間は雲州を御
手に入られ候儀一向成間敷と被思召新宮衆毛利家へ心をよせ晴久
へ逆心の通世上に取沙汰有之様に被遊候に付此段晴久被聞付世上
にはいかん共いへ對我等一門衆逆意は有まし乍去不審なる取沙汰
なりとおもひたまふ時節御殺し不被成して不叶科人に此御使を仕
候は、一命を御助可被成と被仰付順禮の姿に被成其者のはだへに
新宮衆への御密書を文箱に入御付させ候て又御中間頭武功有之者
に様子を得と被仰合爲物聞雲州へ被遣候此兩人の者共雲州へ参り
人はなれの山中にて右の順禮を殺し捨置候て御中間頭は罷歸候所

の者見出し衣類をはき取はたへに付たる文箱を所の代官へ差出候
に付代官早々晴久の入御披見候右の御密書御文體に内々互に得御
意候一儀彌無御別心彼仁を於被打果は御所領の儀如御望雲伯を進
置可申との御神文也晴久見たまひ扱は世上の取沙汰事實也と存給
ふ處に富田の城御裏向しかも平人の参る事不相成候處に落し文有
之當所もなし日付名もなし其文に我等事は毛利家へ味方仕候間此
以後はたとひ命なからへ候とても懸御目候事は有ましく候扱々御
名殘おしく存候儀は筆にも盡かたきと書たる文也是を見付何かと
申合候を晴久聞たまひ此文を見られいよ、驚き逆心無疑とて可
被打果に内談相極り天文二十三年十一月朔日尼子家の舊例にて來
年年中の備定爲談合一門家老悉く登城する晴久は風氣と號し對面
もなく及日暮迄料理をも不出新宮黨衆を飢につからかし其後晴久

及日暮彌氣色快無之に付出座不相成候重ての談合に可仕候通以使被申出候に付各退出候紀伊守は老人故子供衆より先達て出られ候討手に被申付候大西十兵衛本田豊前守道につくはひて罷居候紀伊守兩人の者へ一禮有て通られ候處を十兵衛走りかゝり組て岨道より谷へ落候谷底は一入闢く候に付豊前守上か下かど詞を掛候時十兵衛大事の仕者也こめて突けと答候其聲を聞て紀伊守を突殺し首を取て備實檢候紀州嫡子誠久は父爲心添一同に退出候を奉りの者共討果候首を取跡より参られ候子供衆孫達此様子を見て被致覺悟候に付打手の侍歴々なれ共手を付候事不相成皆平伏して通し候に付無異儀新宮へ歸り籠城候翌二日早天より富田の士共不殘新宮へ押よせ攻候へ共攻崩候儀不相成富田にて口をきゝ候程の士半分打死仕候新宮に奉公仕候者共は本手の者の二男三男親類縁者なれば

別にすへき手立もなし呼とり候へどの儀にて親伯父舅いつれも堀端迄まいり紀伊守殿を先として新宮の御一族晴久公に逆心被成候に付如此被仰付候逆心不義の主人に届候時は却て侍の非本意早々御本手へ降參致し御奉公仕り立身せよと聲々によばはり候因茲過半欠落仕り城も無勢に成候に付二日の夜中兄弟伯父甥一所にて切腹也其時誠久の四男孫四郎殿は幼年に付乳母懷中に隠し新宮を落て備後の徳分寺へ行て頼みければ住持請取介抱し成人有て出家になり後には京へ上り東福寺に居被申候是勝久也仍如件

藝州矢野千手山被攻取事

一弘治元年乙卯四月十一日藝州矢野の千手山に陣取候敵の陣城明神山へ被取懸御切崩候時高名の衆粟屋木工丞赤川又五郎元就公御父子御兩判の御感狀也木工丞へ被下候御感狀には先懸仕と有之又五

郎へ被下候御感狀には中間四郎右衛門尾頭の丸にて敵を討取神妙也と有之渡邊飛驒守坂新五左衛門尾頭の丸にて鎗を仕候へ共先後の争ひ兩人仕に付て御感狀雙方へ不被遣と飛驒守覺書に有之末國伊豆守左馬助へ被下候御感狀には被官石井孫十郎敵を討取神妙と有之此外追て考可記之

一同年に藝州山里に城を築せられ三戸新兵衛に御加増を被下城番頭被仰付被指置候事

陶晴賢入道全姜嚴島之城攻る事

一元就公常に陶入道と被逐御一戰可被決勝負とは被思召候へ共豊筑防長の人數二萬か一萬七八千は堅く可有之御味方は御用に立候者雜兵共に三千ならては無之に付平場の御一戰ちと危く被思召候に付敵を嚴島へ渡海させ彼地におゐて可被決御勝負と御工夫にて常

常の御出語にも陶入道嚴島へ渡海候て海上の運送を留諸所へ手を配り働におゐては御當方の御手遣不自由に成其上糧米の津入無之時は畢竟御負に可相成と被思召彼島に新城を御拵被成入道渡海無之様にと御心遣被遊候通各へ御咄の次手々々に被仰聞候大將の御出語は一日の中に國中へも聞へ候物なれば吉田に取沙汰仕候を全姜承り左様も可有之と存候刻天野右衛門入道致浪人參り候節元就公御咄の次手に被仰聞候に付此段委細に陶へ慶菴物語仕候其上已斐新里方より毛利與三へ遣候書狀披見にて以之外立腹仕兎角嚴島へ渡り彼城を責落し彼等兩人の首を刎可散憤と存に付先防州岩國迄出張し爰におゐて人數を揃へ候内弘中三河守方へ嚴島渡海の儀談合仕る三河守聞て宮島へ御渡海の儀先御延引可然存候元就智謀ふかき大將にて候間いか様の手立可有御座もしれず就中宮島に新

城を構へ候ことも是又いかやらの慮に候哉難計候間とくと御見聞候て可有御渡海候と異見申候へ共入道無分別結句臆病なる申様とてそしり彌人數を集申候事

付桂元澄計策之事

一元就公桂元澄を召て密に被仰聞候は此度陶入道宮島於渡海仕は島にて被遂御一戦有無の可被決御勝負と御議定候然時は吉田御留守の儀御頼被成度被思召候宮島にて被遊御討死候は、御妻子の儀御恥辱無之様にさくまひ仕り進上被申候は、いか様にならせられ候て後迄も可爲御本望候次には又陶方へ對我等逆意の子細書立誓紙血判にて内通仕候様にと被仰聞候に付奉得其旨候通御請申上入道方へ被申入候趣は我等對元就遺恨の儀共數多御座候箇條を以得御意候間被入御披見可被下候如此の儀共數多候に付一度逆心を企遂

本意度念願に候へ共小身の私に御座候へは達存念候儀不相成候義長公の御威光貴老の御太刀影を以遂本意候は、生々世々不忘置難有可奉存候右之通に付御本意の上所領等の望聊無御座候間御懇意被成可被下候此度宮島へ御渡海被成候は、元就も渡海可仕候無左は兵船を集め船軍可仕候いか様地をはなれ可罷出候間其節企逆意吉田を攻取可申候然時は元就敗軍無疑候此外御手立の儀御座候はは委細に可被仰下候遂其節可申候右之條々於僞申上はと靈社の起請文に血判を居密に岩國へ遣し被申候へは陶披見し大に悦ひ不日に嚴島渡海可申候間被仰越候趣無相違可被相調候左候は、御本意の上任御望御恩賞有之候様に屋形へ可申上候此段僞無之候とて誓紙にて返翰仕り則海上の爲順見三浦越中守と差出候越中守倔強の兵五百人召連數艘の兵船に乗て嚴島草津仁保島等致順見仁保島へ

は船をよせ打上り此島の城には香川光景罷居候に付城兵二百餘人出向防戦仕候香川自身鍵にて敵を突伏せ手柄仕候家來の宗像三郎左衛門續て一人討取ければ越中引退乗船仕る日既に暮候に付其後は戦も無之候香川家人芥川七郎次郎討死仕る左候て越中守岩國罷歸海上の様子入道に申聞せ候上彌渡海の段諸軍へ申渡し弘治元年九月下旬豊筑防長四箇國の人数都合二萬の勢を引卒し兵船數百艘に取乘て嚴島渡海仕候船手警固大將には宇賀島と申者也扱入道嚴島へ著船候て塔之岡に本陣を居總勢は塔之岡の東西に陣取晝夜稠敷城を攻候弘中三河守は一同に渡海せず一兩日跡より渡候時陶入道は敵の手立を不知渡海候我等事は敵に手立有之段存候得共渡海仕らす候時は臆病者と嘲りを請申事口惜ければ討死仕りに渡り申候間各承り候へ後年の爲に如此申置候とて遺言仕たる由候事

元就公草津御出張之事付御願狀之事

一元就公陶渡海仕候通被聞召頓て草津へ御出張被成著到を以御人数を御沙汰被遊候處に吉田御留守にも御人数を置せられ諸所の城番就被仰付候に御三家の人数共に御用に立候者雜兵共に三千三百餘有之御幕下の衆には石州の出羽藝州にては熊谷天野阿曾沼三須飯田遠藤蘆原香川淡路守父子山縣福井福島桑原豊島備後衆には杉原若狹守山田出雲守同左衛門浦兵部宗勝此衆の人数一千餘有之に付總御人数四千四百計に候草津にて小早川殿御待被成候處に頓て御出張候へは野島來島方へ御手遣候哉と御尋被成候浦兵部を御使に被遣候通御返答被成候隆景兵部を被召寄野島方への御使被仰付候時兵部御請に沖警固御味方仕致御馳走候様にとの御事委細心得申候條仰之通可申聞候若承引不仕候時は指ちかへ御用に立可申覺

悟に御座候間左様御心得被下候様にと被申上の由に候其後沖より軍船數百艘押來候定て伊豫の沖警固にて可有之候御味方に參候哉とて上下御見物被遊候陶方よりも馳走頼存之通手遣仕候に付敵方にも同前に見申の由候然處に右之船共廿日市の沖へ乘込碇をゑろし申候時扱は御味方に參候とて上下御大慶候敵方には力を落し申たる由に候左候て後沖警固兩大將より以使者御馳走爲可申上兵船三百艘にて罷越候通申上候へは口上之趣被聞召御感悅不大形飯米鹽噌薪等迄被遣其上は御本意之上は矢代島一圓に可被遣之旨被仰渡候其以後宮之城如何共候哉と無御心許被思召瀬戸の大船一艘能かこひ城の様體承りに夜中被遣候此船敵船に紛れ城近く押付はし船を以城中へ内通申候へは水の手をとられ難儀仕候矢倉をもほり崩し候を著物を破り大綱に打やう々々に抱留申體に候今の分に御

座候は、十日とはもたへ申間敷の通申に付能々承り届候て罷歸趣申上候へは様子被聞召近日に御渡海可被遊と被思召嚴島大明神へ御願狀を籠らるゝ其文曰

夫以嚴島大明神者本地大慈大悲之觀世音菩薩也元就謹而所奉祈之發願者蒙朝敵追伐之 勅命斧鉞之前卒臥病席當敵武運已微也嗚呼冀者今在大慈大悲誓一願爲本復苟元就汲平城桓武之二流生神明擁護之門扇垂光利生之德于茲在多々羅之家累代臣謂陶者橫振猛威刹殺其主蔓八逆罪葛藟相連而動國殘賊民渠積惡誰豈不惡之矣愚息隆元雖爲廷弱依 綸命發義兵欲斷根拽葉神者不稟非禮與正義所仰天誅也伏乞有悲歎之感應當社造營可超過清盛志者也

弘治元年乙卯十月二十八日 大江 元 就敬白

如右御願狀御認被成志道源藏就良を爲御使渡されけるに源藏社人

の如く淨衣烏帽子を著し幣帛を持雜魚賣小船に便を乞殿島に渡る處に宇賀島海賊大島海賊共の番船數百艘かけ並て有之中を通り候へは大船よりかきにかけ魚舟を引よせ雜魚を買何のどかめもなく宮の地へ上り社頭へ參詣し御願狀を納め神樂をあげ敵陣の様子を悉く見て歸る此御願狀を社人より則陶方へ指出す陶披見して大に悦候然處に弘中三河守陶本陣へ出仕して此願狀は如何様手立成へし明日未明に御人數は損候共無理攻に城を攻破り候は、元就いか様の謀有之と云共失勝利こと必然也急に御攻させ有へしと諫めけれ共入道不承引城攻は十一月朔日と定め候事

元就公嚴島御渡海御合戰之事

一元就公は御渡海有へきに御議定候て草津より三里西の方地のこせん火立山へ御陣を替られ候路次の行列前後の次第もなく三行にも

道せはき所は二行にても押候へと被仰付候は小勢に敵方より見申やうにとの儀也御陣替の翌日午刻計に今日又草津へ御歸被成候に付御家中其外の小荷駄人夫若輩の草履取老人をは御先へ可遣候道をは一行に押候へと被仰出候に村軍用に不立候者共小荷駄一同に草津へ罷歸候右被仰渡候時總勢には若雨風強く候は、御滯留被成候儀も可有之候間二日三日宛の飯米は上下共に腰に付候様にと被仰出候左候て其日の晚巖島へ御渡海被遊候條總勢上下共に柵の木一本繩一房可持之三日の飯米を腰に著左繩のたすき二つ卷合言葉は勝と問は勝と可答總船にはかゝり焼へからす御座船の火を目當に仕り可渡海船乗組の儀は一番衆乗候て沖へ漕浮二番衆乗へし船場には船配りの者數多被仰付候間込合不申候様に仕り船配りの者申次第に乗船可仕候著岸の時も込合不申候様に一の衆二の衆段々

に船より上り可申候道筋の儀は兼て枝折被仰付候間一手々々の松明にて見分可申の通被仰渡候河之内御船手衆へは兒玉内藏大夫下知を承り可申候人數乗組の儀一番二番二手に御分候間一番衆を乗せ仕舞其船を漕出し候て二番手を乗せ可申候掛聲櫓拍子仕間敷候又腰付の飯米の外兵糧積申間敷通被仰渡候沖警固へは小早川隆景を大手へ被指向候間此人數を乗せ可被申候宮の内より先は夜に入大野の山へりを久芳の方へ行西の方より嚴島へ乗可被申候嚴島の沖乘通り候時は櫓數無用に候尤掛聲櫓拍子總て高聲停止に可仕之旨被仰渡候各船手の衆申上候は昨日よりの西風彌吹つものり時雨申候間御船出し申候儀いかゝ可有之哉と伺ひ被申候處に尤之申様に候へ共今日は最上吉日に候其上雨風は御吉例に候兎角可有御乗船候間左様相心得候へと被仰付隆元公へ御意被成候は御自分には陸

百四

に残られ候へ宮の御一戦に御打死被遊候は、何とぞ後手の御弓矢成立候様に被遊御家をたもたれ候様にと被仰渡候御請に元就公御残り被遊候とても渡海仕候者共悉く討死仕候ては被思召候様に御弓矢成立申間敷候まして私残り居申候儀存寄も無御座候と被仰上御具足の御上帶の端を御切被成二度御結ひ不被遊御覺悟にて御先へ御乗船被遊候隆元公の御覺悟を見候て御手廻衆其外の者共も千死を極め乗船仕候然處に桂元澄俄に疝氣を煩付御供不相成焼火にあたり残り居被申候臆病なる仁にても無之候いか様の儀に候哉と各不審仕たる由に候扱御船を出し候處に時雨降波風あらく御難儀に御座候へ共半途よりは波風和らき殊にむかふ風にて無之に付御供船に至る迄無異儀嚴島の西鼓の浦へ御著船候元就公兒玉内藏大夫を召候て御座船を初め一艘にても宮の地に船置申間敷候早々漕

戻し候様に可申付之旨被仰渡候内藏大夫承り御座船をは残し置可
申と申上候へは御座船を一の先に戻し候へと御意に候山縣筑後守
此御意を承り内藏大夫申上様悪さと存候て御前へ罷出總の船戻し
申儀如何に存候迎の御馳走にて御座候間當島に掛置御用可承之通
申上候時いやく一戦に得勝利候時は五三日も此地に滞留すへし
其内に迎船の儀は可申遣候又打負候時は下々に至迄船の心候て討
死の手際悪敷無面目可爲次第候早々戻し候へと御意に付内藏大夫
山縣申談御座船計隠し置残る船は悉く戻し申候處に十町計漕出し
候て火を立申候を山より總勢見候て彌討死の地盤を堅め申たる由
に候元就公船より御揚り被成候時爰をは何と申所そと御尋被遊候
へは鼓の浦と申所にて御座候通船頭申上候上の山はと御尋われは
はくち尾と申上候に付扱は打勝たるよと御意被成候宍戸殿福原殿

御挨拶に拍子も能御座候と被申上候上の尾へ御上り被成候刻鹿一
疋参り御先へ立上り申候大明神の御加護にて御道しるへ仕候と御
意被成候へは各難有奉存之通被申上候元就公御旗本手頭は兒玉三
郎右衛門赤川左京平佐源七郎粟屋與十郎此外歴々也隆元公へは粟
屋掃部助國司右京赤川十郎左衛門同源右衛門兼重彌三郎五人御付
被成候吉川殿は新庄の御手人數八百餘に御幕下衆宍戸殿福原殿此
外御一門中は手勢計にて別手也小早川殿は大手へ御向ひ被成沖營
固の船に被爲召候手頭衆は飯田讚岐守河内備後守鶴飼新右衛門豊
島東市佑船手は磯兼左近也野島來島兩大將の兵船三百餘艘是も亥
の刻計に漕寄候時小早川殿仰に如此大波にもられ候ては人數悉く
船に醉明朝の役に立間敷候其上敵船近くつなき申事も如何に候間
大本へ船を著候へと御意候磯兼左近浦兵部少承り如此の大風には

敵も味方もいか様なる手立も難成候敵船の中を盪ぬけ鳥居へ船を付可申候條御人數を夜中に少宛御揚可然候夜更候間敵も心付申間敷の通申上船を盪込候然とも敵船筏を組たる様に並ひ候に付此方の船難著候時兵部船端に立て是は筑前の宗像秋月千手連緒各の人數にて候爲御加勢罷上り只今著岸申候此船共爰を少ひらき候へと高聲に申候へは暗の夜なるに付見分も不成水夫共碇綱をくり少々道を明候に付其間を通り鳥井へ著候て御人數少宛上げ候小早川殿は東の方高き山へ御揚り被成夜の明るを御待被成候元就公は御先手吉川殿にて候へ共一の先へ山へ御揚り被成候諸勢も一手毎の先に松明を持道を見分悉く岑へ押上げ候へは早夜も明方に成候元就公時分御はからひ被成はの々と明候時貝を御吹せ候て鯨波頭を御自分に御揚被成候へは諸勢一同に時を上げ候此聲を敵陣に聞て

驚き騒くこと不大形候弘中三河守大和伊豆守三浦越中守も面々の陳所にては防戦なる間敷と存候哉陶本陳へ集り候就夫敵の總勢防くへきとは不仕みな塔の岡へ馳集るに付市の場の如くに込合申候其内此御方の衆塔の岡の上横山迄をろし掛候此時一刻に攻崩せと御下知被成候へは諸將面もふらすおろし掛自身柵逆茂木を押破り攻込候に付陶方の大軍崩立て逃散候全姜采配を取てきたなし者共と下知しけれ共崩立たる大勢聞も不入我先にと船に取乗て逃るもあり大勢乗込船を乗沈て死するもあり然處に野島來島浦兵部少并に河の内の警固衆の軍船共數百艘押掛打取追拂ふに付宇賀島大濱以下の船頭共悉く大島をさして漕逃候乗おくれたる者共は山傳ひに敗北する陶入道も切腹すへきに相極其覺悟仕候處に三浦越中守異見に先御一命を全し山口へ御引取候て勢を集られ重て本意を遂

らるへし我等殿を仕り御跡を防ぎ可申候若敵急に押掛候にゐるては討死可仕候其間に落延たまへと申ければさらは船に乗て退くへしとて山縁を龍か馬場へ退き夫より大元の谷へ落船の見合被仕候へ共一艘も見えず候に付青のりへ退き船に乗へさど手遣候へ共船頭の大濱以下の者共みな逃て船一艘も無之に付今は是迄なりとて入道自害しければ伊香賀民部垣並佐渡山崎勘解由申談入道首を朽葉の衿に包み山中へ持行岩の間に能隠し置垣並山崎は所を替て差ちかへ死す以上侍七人入道最期の供を仕る中にも伊香賀民部少入道は陶若年より守にて後見仕片時も側をはなれざる者なれば我等死骸を見付て全姜の首をさかし出すこともあらんと存二町計濱の手へ下りて切腹する此三人の首をは兒玉内藏丞手へ討取といへ共いつれの首共しらす候處に二宮木工助能見知り夫々と申に付て知

れ申候定て此者共自害仕たる所にて陶入道も自害すへしとて木の葉を返し尋ねけれ共とり出し候事不相成候處に同五日の日陶草履取に乙若と申て年十四五なる童最期迄致供山中に隠れ居けるか立出兒玉内藏丞にむかひ一命を助給は、入道の首ある所を教へ可申と申に付則彼草履取を先に立行て取出し備御實檢候三浦越中守は入道を何とそ仕り落し度存青のりの岨道にひかへて居候處へ小早川殿三百計にて追掛らる、越中守待請て切てかゝる隆景も御自身鎧を取て戦たまふ赤川左京と越中守鎧を合て暫くせり合けれ共勝負は不付候三浦一手の組の侍共隆景を大將と見て目にかけ十六人突て掛り既にあやうく見え給ひける處に御手廻の草井市之佑又市之有山縣勘次郎内海市郎南勘兵衛御同朋の井上一忠此等五人かけ隔て一同に討死する小早川殿も薄手三箇所負給ひけるに付赤川左

京御供仕敵はなれ給ふ小早川殿衆數多討れ候通元春被聞召急き駆
 付かゝり給ふ此時吉川殿衆には樋口彦三郎討死する清水新三郎は
 深手を負候越中守は組衆家人共にみな討死して唯一人石に腰を掛
 て息をつく所を内藤内藏丞高彌三郎兩人後より弓にて射ければ矢
 二筋中りけれ共淺手にて少も不用鍵を取て立上る所へ二宮木工助
 かけ合互に鍵にて突合候處に木工助鍵にて三浦を脇より肩先へ突
 通しければ重手故倒れ候處を井尻又右衛門走りかゝり首を取らん
 としけるにさかしき岨にて越中谷底へころひ落るに付内藤内藏丞
 早くおり合て首を討取候越中守一組の者共能働候こそ理りなれ其
 ころ大内家にて十六騎武者といはれし者共なり又隆元公御旗本へ
 敵四五百人計切て掛る御手廻の衆一命を限りに戰候處へ元就公御
 旗本より兒玉内藏丞粟屋與十郎掛合する福原左近一手もかけ合せ

即時敵を追崩し追討に無殘打取候御本手衆にも數多手負有之中に
 も粟屋又次郎討死仕候弘中三河守隆包全嫡男中務大輔五百計の人
 數にて瀧小路を後にあて追來る敵を待居候吉川殿一番に追掛らる
 弘中父子死を一途に極め切てかゝる吉川殿衆切立られて十四五
 間程しざる所に元春自身鍵を取て下知したまへは新庄衆取て返し
 相戦ふ然處に青景波多野町野等三百人計横合に突て掛るに付吉川
 勢既に突立られんと見えし處に熊谷伊豆守天野紀伊守急きかけ合
 散々に切立ければ青景波多野町野等不叶して引退く弘中父子は瀧
 小路の左右の小家へ火を掛其紛れに上の山へ引上る小早川殿は陶
 入道落行跡を慕ひ青のりの方へ追掛らるゝ處に羽仁越前守同將監
 三十人計にて山の陰より切て出る其近邊よりかくれ居たる敵共出
 合五百人計一手になり切てかゝる小早川殿衆切立られて引退く所

に元春此様子を見たまひ旗を押立一文字に掛りたまへは小早川殿衆も返し合せ相戦ふ然處に石州の住人出羽中務かけ合て羽仁兄弟を討取に付殘黨みな退散するを追打數十人仕候弘中父子は數百の家人も大半討れければ瀧小路より山へ上り龍ヶ馬場と云大切所を幸に取籠る此段被聞召大廻りに柵を付一人も洩さぬ様に可仕之通御下知に依て則柵を結ひ朔日より三日の朝迄取籠罷居候其内中務は勇士あれば度々切て出數人に手負せ切伏候家人共を謀り呼取みな成敗仕る終には主從三人に成罷居候中務又働出る所を吉川殿家來小坂越中弓にて射ければ其矢弓手の肩に中り少しひるむ所を熊谷家中末田新右衛門組伏首を取る此爲體を見て父三河守腹を切へきとする所を阿曾沼家人井上源右衛門走り掛るそこにて三河守太刀を抜て戦ふといへども朔日より三日の朝迄の働につかれて終に

源右衛門に討れ候爰に大和伊豆守は手勢七十餘人にて度々返し合せ戦ひけるに付大かた家人も打死し幾か二十餘人になり退けるを香川左衛門尉追掛て見れば舊知音の伊豆守也互に名乗合ひ弱氣を見せしと一入たしなみ戦ひれる内に元就公仰に大和伊豆守儀は文武の達人と云者也御家人に被遊度由常々御意候事を存出し御心入之段を伊豆守に申聞せ生捕に仕候也此御合戦弘治元年乙卯十一月朔日朝六ツに初まり八ツ時に終る敵を打捕其數四千七百八十餘人藝州嚴島御合戦とは是也如件

付生捕之事

一同月十一日迄嚴島に御在陣被遊山中を御穿鑿就被仰付三百人餘有之水に溺れて死亡する者は數を不知候生捕の中に渡邊可姓と申者あり常に狂歌を詠し申の由被聞及候間狂歌を仕候は、一命を可被

助之通被仰出候へは則よみ申候

かけてしも頼むやもりのしめたすき命ひとつに二つ巻して

と申上ければ一命を御助被成候又陶同朋に宗阿彌と申者是も常に
歌道を嗜み候通被聞召歌詠と被仰出候へハ則讀て差上る

名を惜む人としいへと身をおしむさにかへて名をば惜ます
と申上ければ歌も折にこそよれ能申たりとて是も命被成御助山口
へ被遣候残る者をはみな地へ渡し首をはねられ候事

付重見因幡守事

一生捕の中に重見因幡守と申者あり豫州河野の一門十八家とて十八
人の内也河野對馬守法名天德寺の近親なり然に天德寺殿嫡子彈正忠と
父子の半不和になり既に弓箭に成候時因幡守親子の禮儀を存し天
德寺殿の味方と成終には伊豫を浪人仕大内義隆を頼み防州へ罷越

候義隆許容有て陶尾張守に預けられ藝州西條の木原と申所にて小
知を給ひ浪人分にて罷居候此度陶に致供嚴島へ渡海候然は因幡守
より御理に御檢使を被下候は、切腹仕度之通申出候元就公被聞召
内々被召抱度被思召候條一命御助置可被成候間御奉公申上候様に
と兒玉内藏丞兼重左衛門を以被仰渡候因幡守承り難有御意身に餘
り忝奉存候へ共切腹の儀存極候間被思召分被下候様にと申出候そ
こにて又御意に被仰聞候儀承引不仕候は、西條に罷居候忝共被召
捕其方目の前にて生害可被仰付候不便に存候は、隨御意切腹の儀
存留り候様にと被仰渡候因幡守御意の旨承り重疊難有御誕生々世
々難忘仕合に候乍去私儀は生國豫州河野一家にて御座候さる子細
に依て豫州を立退大内義隆を頼み山口へ罷越候處に御許容候て當
國西條にて小知を給ひ陶に預け被置候入道事我等へ別て懇切に候

爲其報謝此度嚴島へ供仕り一所にていか様にも可罷成と存候處に多勢に隔てられ剩へ生捕に罷成如此の體無是非奉存候迎の御厚恩には早々切腹被仰付可被下候子共の儀如何様に被仰付候とても不苦候其段はかねて存極罷居候通申上に付て兩人の御使衆委細に申上候へは彌おしくは被思召候へ共此上は任望切腹可被仰付候子共の儀は御取立被成可被召仕の旨右兩人を以被仰渡候へは難有奉存の通御禮申上嚴島ありの浦にて切腹仕候子共兩人被召出別て忝被召仕候兄は木原兵部弟は木原二郎兵衛と申て戦場の御奉公及數度申上に付一入御念比に被召仕候事

一陶入道首御實檢の後廿日市洞雲寺へ被遣葬禮被仰付石塔御建させ被成候事

一右之御合戦に手柄仕候者數多御座候へ共御感狀は不被下候渡邊飛

驛守覺書に於嚴島首三ツ自身討取候へ共總並に御感狀不被下候と有之然共塔の岡陶陣所へ被押寄候時一番首を取候と聲々に名乗候衆は中原善左衛門坪井將監福原左京渡邊神右衛門兒玉四郎兵衛庄原兵部波多野源兵衛志道源藏桂善左衛門福原總右衛門佐藤總右衛門飯田中村三戸三宅此外歴々有之と云々追て考可記之

一御合戦に敵大勢被討取御味方も打死手負數多の儀に御座候へ共大本より御神前には死人一人も無之候大明神の御神力奇特なる儀と上下御沙汰被成候事

嚴島經堂御建立之事

付内藤河内守林肥前守へ御尋之事

一嚴島經堂御建立之儀は當島御渡海の節御願狀を被納候此願狀にも御造營の儀有之又は御合戦の刻明神の御禁戒を破られ清地を穢さ

れ候爲め御恐旁にて候故被思召立候へ共元就公御一生は御弓箭の御手透き一圓に無御座候に付被及御末期小早川殿へ被仰置候就夫輝元公の御代文祿元年戊午御造營の儀被仰付候刻朝鮮御陣の御觸に付被差止同三年庚申の春經堂計御建立成就仕候其年中は御參詣も不被爲成翌酉の歲輝元公被遊御參詣御拜禮事畢て經堂に被成御座内藤河内守林肥前守を召て輝元公御意に如此の嶮岨を諸勢乗越申候儀御不審に被思召候いか様の手立にて越申候哉と御尋候肥前守承り常式と弓箭の時は人の精力格別に罷成候昔より鳥もかけり難き城を攻落候例し多く御座候攻落し候て後は扱々奇特なる儀共と存る様に御座候唯今あの東の峯を夜中は扱置晝上り候へと御下知にても河内守肥前守などは不罷成候と申上候て笑ひ申候輝元公又御意に元就公御遺言に付先經堂御取立候此造作にては本社を御

建立可被遊ものをと被思召候扱元就公經堂の儀被仰置候子細共候哉と御尋候へは河内守承り御合戦の時此下の坂より東瀧小路あれに見え申候小河の橋より御宮の方前後左右共に討死の者一人も無御座候此坂の下は小早川殿御合戦場にて敵味方大分打死仕候處に手負もあの河を越相果味方討死の者も此坂を越討死仕候元就公にも不思議なる御神力と御意被成諸人も奇特なる儀共と奉存候と申上候輝元公御意に敵味方共に死穢の儀いか様に被仰付候哉と御尋候河内守御請に死人をは御合戦終り船にて大野へ御取捨させ候手負も陸へ御渡し血流れ申す所をは悉く土をけつり捨社壇廻廊迄潮にて洗ひ清め朔日より七日迄御神樂又龍頭曾利の舞被仰付候其後敵方共に供養として萬部の經於當島御執行候と申上候其後御合戦の各働の様子御尋被成委細に被聞召又御意に於當地勝鬨を御執行

候當家の例になるへき由元就公御意候御書付いまた御拜見不被遊候各覺へ候趣申上候様にと被仰下候肥前守河内守方を見合申候へは其方被申上候へと辭し申に付肥前守申上候は陶首見え不申に付山中無殘所穿鑿被仰付候處に同五日の朝陶草履取一命於御助は首の在所おしへ可申候通兒玉内藏丞に申に付則彼者を先に立候て參候へは山の中岩の間に朽葉の袷に包み有之候則此段申上候へは御實檢の上勝間を御執行ひ可被成とて諸將の人數召連一所へ可參之旨被仰觸候に付各早速被罷出人數をは面々の備場にしかど立置頭々は御前の左右に列座仕候陶首をは高さ三尺程に棚を付其上に絹に包み有之候元就公隆元公御父子は御鎧を召御床机に被成御座候御床机の左の方半間程に平佐源七郎御太刀を持罷居候其より間半程置て廻神藤十郎御弓を持甲矢をつかひて矢を右の手に握り膝に

乗て持居候右の方少し前へ寄り市川式部少輔貝を膝に載て罷居候其跡の方御床机近く提子に御手水を入南天の葉を置て御小姓佐武小次郎其次に内藤河内守其時は孫貝の右の方に赤川十郎左衛門太鼓を前に置撥を持て畏る御床机右の後に粟屋孫次郎御手拭を扇に居て畏る右の少し前へより秋山隼人御團を持跪む御前右の方に桂上總介渡邊左衛門大夫跪居す元就公御策を御取候て陶首を御指し被遊候へは兒玉周防守御前を立て首の右の方の衣を少し引あけ申候元就公御大音に大内の家累代の臣として義隆父子を殺し八逆罪を犯す依て天罰不遁殊に勅勘を以て只今如此誰にか恨あるへきと被仰御睨み被成策を三度御振候其時市川貝を吹く元就公御團を御取被成御太刀を少し御拔懸候て御團を御取直し太鼓の方を御覽候時赤川太鼓の頭を二度打時御前の左右に列座の諸將膝を立刀に手

を掛る時に桂上總介関頭を揚る又太鼓の頭を三度打と等しく渡邊左衛門大夫関を請て後總軍関を作り陶首をは凱を作り候間に陣僧罷出棚より引落し取て物陰へ逃入申候左候て御前に御手水を被遊諸將へも手水被遣候通林肥前守申上候此段は河内守こそ能覺へ可申と申候へは河内返答に大闇様御尋の節も其方こそ被申上候へ若輩を不覺候とて笑ひ申候其後輝元公御機嫌能御下向被遊候事右之覺書は馬屋原久閑其時御前に罷居承り記置候舊記を以て今又爰に記之

元就公御歸陣之事並杉楢森降參之事

一元就公十一月十一日迄宮島に御在陣被遊島中無殘所御穿鑿被仰付隠れ居候敵共悉く御誅伐候て同十二日小瀉へ御陣を被移御逗留被成候内防州玖珂郡の内蓮花山の城主楢杜下野守方より以使者自今

以後御味方仕山口御發向の御先手致し可遂御馳走の旨誓紙を以て申上其上人質兩人差越申に付趣御父子被聞召被遂御分別人質を御留置候に付頓て下野守御禮に罷出候御父子御對面被遊被差返候又同郡の内倉掛山の城主杉治部大輔儀是又降參の御詫言申上爲人質有永加賀守楊井彌二郎と申者兩人差越申に付無別條御分別にて人質をは岡總左衛門末國伊豆守に御預け被成候事

鞍掛之城被攻崩事

一元就公御父子兩川殿宍戸殿其外御一同に小瀉より岩國へ御陣を被替候御旗本は永興寺に御在陣候吉川殿は御庄の市小早川殿は河内の壇に御陣取候然處に同月廿七日の夜丑の刻に楢杜下野守より以飛札永興寺御陣所へ申上候趣は杉治部大輔儀御味方申上候へ其内存は義長へ一味仕候段粗承り候に付差川へ人を遣待伏せ仕候山口

への飛脚をからめ取治部方より義長へ遣候書狀を取致進上候通申
來候に付其狀を御披見被遊候へは何とそ手立を以て元就父子を打
取可申候間御加勢を被差越候様との文體なり就夫寅の刻に御出馬
被遊候通御陣觸候兩川殿へは倉掛に御出馬候様にと以御使被仰遣
候即時寅の刻に御馬を被出候兩川殿も被仰遣候通寅の刻に被打出
候中間三里の所を一時の内に押付廿八日の未明に倉掛の城へ攻込
候存かけもなき事なれば防く事不成して城兵二の曲輪へ引退く治
部大輔自身鎧を取て突て出深手を負弱る所を小方太郎左衛門家人
吉山と申者首を取る大將討れければ城兵機を失ふに付即時乗破り
雜兵共首數八百九十餘級討取之御旗本并兩川殿矢戸殿家中手柄の
衆多しといへ共假名不分明御旗本にては中村新右衛門一番乗討死
候吉川殿にては森脇市郎右衛門山縣四郎右衛門手柄仕の由候城落

去候て則其日未の刻岩國へ御歸陳永興寺に御本陳を居られ候吉川
殿は中須の賀屋和泉所に御宿陣小早川殿は琥珀院に御在陣也如件

付杉治部大輔人質之事

一杉治部大輔人質有永加賀守楊井彌次郎儀御庄の町屋にて岡宗左衛
門末國伊豆守に被仰付候上下十四五人働候へとも宗左衛門伊豆守
武功の者にて候故無殘討果候伊豆守は深手負死去仕候宗左衛門は
手疵淺く候て快罷成候事

或舊記に岡筑前守末國伊豆守と有之其節兩人共に名を改候哉追
て考へ可記之

防州若山落去之事

一防州富田の若山は陶代々の居城也入道嫡子五郎長房事は父一同に
殿島渡海不仕留守居に罷在候處に入道討死の到來を聞て力を落し

父の弔に元就と一戦して可散鬱憤次には杉治部大輔相杜下野守心
替り仕候間彼等兩人をも退治可仕候御加勢被差越候様にと山口へ
以使者申ければ義長家の面々召集の談合有し處に各如何存候哉山
口御無勢に候間御加勢は御延引可然と申に付五郎方へ加勢なかり
ければ長房大に立腹仕り我等手勢計にても元就を當城に引請亡父
の弔合戦仕可討死と覺悟を極め待居候處に杉伯耆守重矩嫡男彈正
忠隆重同弟七郎忠重父伯耆守を入道に討れて後豊後國箕島に隠れ
居ける處に入道討死を聞て一度入道を可討とおもひしに今は力な
しせめて五郎を成共可討と存立爰かしこに忍ひ居ける家人を集め
二百餘人召連弘治二年二月廿二日の暮方に防州富田の若山へ押寄
る城中には山口よりの加勢なりと心得搦手の門をひらく隆重此様
子を見て扱は城中に我等を味方とおもふなりと察し偽りて城に入

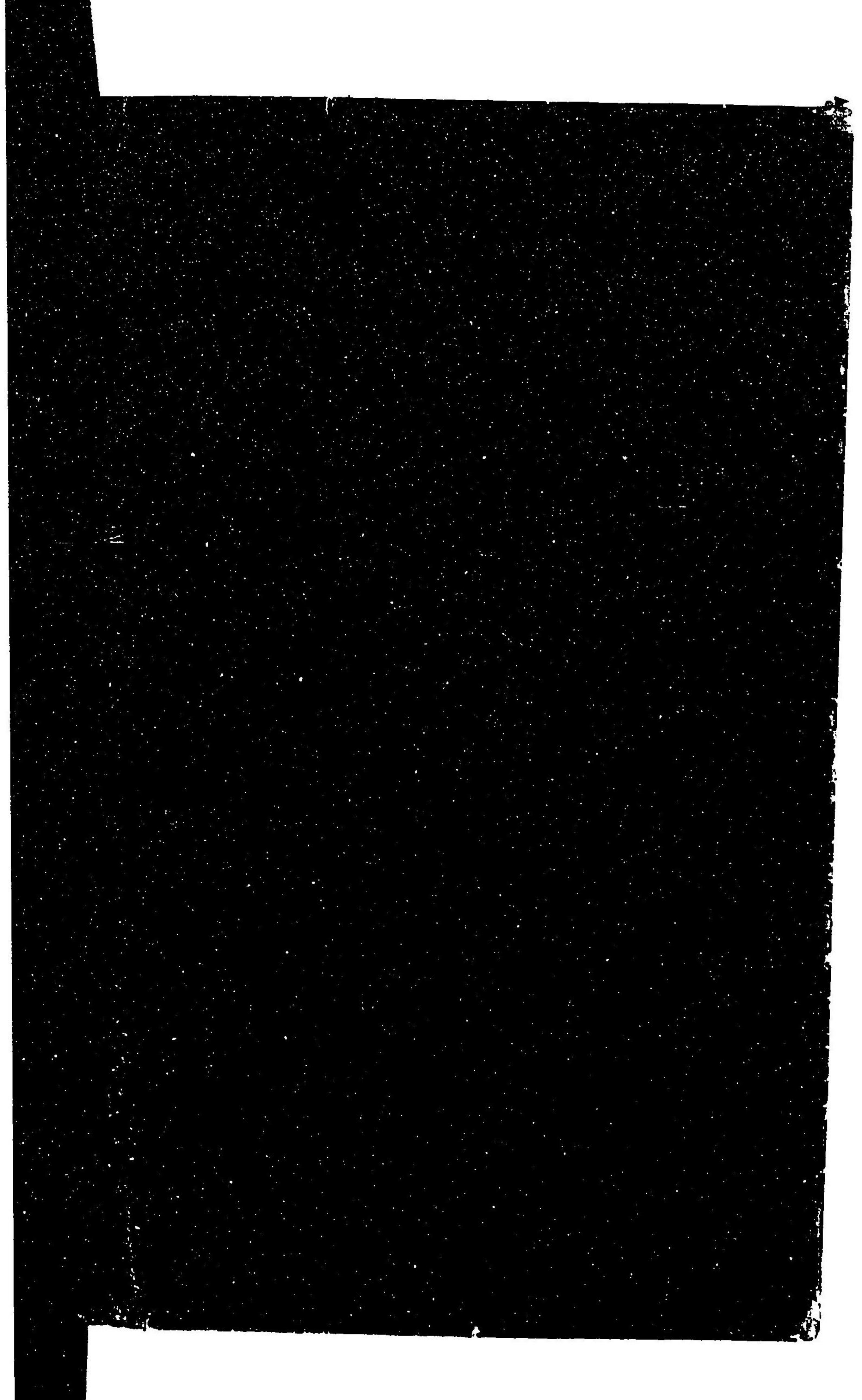
そにて名乗掛不意を討に依て何の造作もなく三の曲輪を乗取る
五郎驚き防き戦ふといへ共城兵は元就より御人數を被差向たると
存に付悉く欠落仕無勢にて防戦も不相成此上は不及是非切腹すへ
しとて既に刀を抜ければ安岡筑前守野田左衛門刀をうはひ取日の
暮けるこそ幸なれ一先落させたまひ屋形と御一所にて兎にも角に
もなり給へと類にいさめければ女中其外幼年の者共を召連夜中に
城を出て徳地迄落ける處に郷人共おこりて道を遮りければ足弱共
をば山口へ落行候へと申聞せ山林にかくし其身は先祖の菩提所な
れば鹿王山龍文寺へ行て切腹す爰に奇妙の物語あり陶の家と申は
琳聖太子より九代の後胤周防介盛房の舍弟盛長陶の姓の元祖也盛
長より五代の孫を越前權守弘政と云此弘政より五郎長房迄十三代
なり然るに五郎長房より七代以前に五郎弘護と云あり弘護行年四

十二歳嫡子鶴壽丸十五歳應仁庚寅の春筑前の守護職を承り箱崎の宮を建立し子孫爲繁榮百日參籠す百日に滿する日神殿の御戸おのつから開けて老翁立出一の厨子を授く内に摩利子天の尊像あり夫より以來陶の家斷絶せは尊像も天に歸らせたまふへしと代々申傳へし不思儀也奇特也長房首にかけたる厨子虚空に飛て失ると也扱又杉隆重は於龍文寺五郎切腹すると聞て駈付首を取岩國の御陣所へ送り進上して奉備御實檢元就公隆元公御感被成前代の所領なれば豊前の國都の郡を被下也如件

吉田物語卷第五終



5
17
7



026017-001-4

5-1

吉田物語

杉岡 權之助就房 / 著

和1冊

M31

ADC-3658

